



# 東北大学附属図書館報 木這子

## BULLETIN OF THE TOHOKU UNIVERSITY LIBRARY

URL <http://www.library.tohoku.ac.jp/>

- 木這子(きぼこ)とは東北地方の方言で、こけしのこと。小芥子這子(こけしぼうこ) -

### 目 次

○大学図書館の「原点」 - 館長に就任して - ... 1	○2005年日・EU フレンドシップウィークイベント：EU の多様性 - 加盟国の様々な言語 - 開催.....14
○アインシュタイン，物理学，図書館..... 4	○研究室向け個別図書館講習会の開催.....15
○温故知新..... 6	○平成17年度目録システム地域講習会（図書コース）を開催.....16
○豆腐と大豆..... 9	○最近の話題から（その4） 「美味しい江戸」.....17
○平成17年度川内地区学部・研究科新生オリエンテーションにおける図書館ガイダンス開催.....11	○東北大学百周年記念事業 平成17年度特別企画展のお知らせ.....19
○平成17年度新生のための図書館オリエンテーション，及び新入学留学生のための英語によるオリエンテーションの開催.....11	○第36回東北地区国立大学図書館協会総会」...19
○国際交流センター主催 新入学留学生オリエンテーションにおける図書館ガイダンス...12	○会 議.....20
○平成17年度蔵書検索講習会(初級編)の開催...12	○附属図書館商議会議員名簿.....21
○駐日欧州委員会代表部 東北大学附属図書館を視察.....13	○人事異動.....22
	○編集後記.....24

## 大学図書館の「原点」 - 館長に就任して -

附属図書館長 野 家 啓 一



大西仁前館長の後を受けて、本年4月1日付けで附属図書館長に就任いたしました。私の専門分野は哲学ですので、古今東西の書籍を蔵する図書館はいわば研究のフィールドそ

のものであり、これまでは一利用者として大いにその恩恵に浴してまいりました。今回、はからずもその管理運営という慣れない仕事に携わることになり、手探り状態で新たな職務と取り組み始めたところです。

大学の教育と研究において図書館の果たす役割の重要性については今さら言うまでもありません。図書館は大学における学術情報のエッセ

ンスが集約される場所として、教育の支援や研究基盤の構築に大きく貢献してきました。おそらく、入学間もない新生が大学の大学らしさを真っ先に感じるのは、講義室でもテニスコートでもなく、整理された膨大な書架と静寂を保った閲覧室とを備えた図書館の知的雰囲気に対してであろうと思います。その意味で、オックスフォード大学のポドレー図書館やハーバード大学のワイドナー記念図書館などの例を挙げるまでもなく、それぞれに特色あるコレクションを備えた図書館は「大学の顔」あるいは「知のシンボル」としての役割を果たしてきました。国宝2点をはじめ、「漱石文庫」や「狩野文庫」などの貴重書を収蔵する本学の附属図書館もその例に漏れません。

しかし、電子ジャーナルや電子ブックなど最近の急速な電子化の動きに伴い、大学図書館のあり方も大きな変貌を余儀なくされています。一昔前までならば、図書館のエントランス・ホールには年代物のカードボックスが鎮座し、真剣な眼差しでカード目録を一枚一枚指で繰る学生の姿が見られましたが、現在ではその場所をコンピュータの端末が占め、目当ての図書や資料の検索はキーボードを通じて瞬時に行われるようになりました。研究者の側からも、電子ジャーナルとデータベースさえあれば、建物としての図書館は不要だとの乱暴な意見さえ聞こえてくるほどです。

もちろん、図書館といえども変転する時代の流れの中にある以上、昨今の学術情報の電子化に迅速に対応すべきことは言うまでもありませんが、他方でこのような転換期にこそ、図書館はその「原点」を見つめ直す必要があると私は考えています。私が思い描く図書館の原点とは、いささか古めかしくて恐縮なのですが、チャールズ・ラムの『エリア随筆』に収められた小篇「休暇中のオックスフォード」に見られる以下のようなイメージです。

「古い書庫というものは、入っているのに何

と好いところであろう！すべての労作をこのポドレー文庫に残し伝えてくれたあらゆる文人の精霊が、あたかも寄宿舍におけるが如く、また生死の間にいるが如くに、此处に休息しているように考えられる。(中略)私はその茂みの中を歩いて、学問を吸い取るような気がする。またその紙魚の臭いのする包紙の香も、楽しい樹園の中に生長した、あの智識の林檎の樹の初花のように薫り高いのである。」(戸川秋骨訳『エリア随筆』岩波文庫、表記を新字新かなに改めた)

ここには、先人たちが残してくれた知的遺産に対する純粹な憧憬の念が率直に吐露されています。ましてラム自身が「若い時に、アカデミックな学府の美食を奪い去られていた私如きもの」と謙遜しているのを目にすれば、学問に対する彼の敬仰の思いは倍音を伴ってわれわれに迫ってきます。かつて林達夫は、これを捉えて「オックスフォード大学は彼にその門を閉ざした、卒業名簿に名の載っていないこの失意の潜在的学生をもったことを誇るもよいし、この青年＝老人の諦観が歌い上げた大学賛歌の余りの純真さに自らの後ろめたい現実を恥じるもよい」と書きつけたことがありました(「十字路に立つ大学」)。知のシンボルとしての大学図書館は、市井の人々(潜在的学生)の学問に対するこのような憧憬と敬仰の思い、そしてそれに応えようとする図書館員の志と地道な努力によって支えられてきたことを、われわれは忘れてはならないと思います。

ラムのポドレー図書館への憧れが古色蒼然としすぎているというならば、もう一つの図書館の理想の形をわれわれは20世紀前衛文学の旗手にしてアルゼンチン国立図書館長を務めた南米の作家ホルヘ・ルイス・ボルヘスの短編「パベルの図書館」の中に見ることができます。「その宇宙(他の人びとはそれを図書館と呼ぶ)は、中央に巨大な換気孔がつき、非常に低い手摺をめぐらした不定数の、おそらく無数の六角形の

回廊から成っている」と始まるこの難解な小説には「図書館は、永遠をこえて存在する」や「図書館は無限でしかも周期的である」といったアフォリズムが散りばめられており、さらにその末尾には、さりげなく以下のような注記が置かれています。

「トレドのレティシア・アルバレスは、歴大な図書館は不要だと述べている。厳密に言えば、ただ一つの本で充分である。九号か十号活字で印刷した、無限数の無限に薄いページから成る並版の一卷である。(中略)この絹のような便覧はとても携帯に便利ではあるまい。」(篠田一士訳『伝奇集』集英社 世界の文学 第9巻)

全世界の図書館に蓄積された人類の知的遺産をあまねく集録した一冊の本、これが図書館の理想の姿であることは言うまでもありません。ボルヘスがこの短編を発表したのは1941年のことでしたが、現在ではインターネット技術の発達により、この理想の図書館が「携帯に便利な」一冊のノート・パソコンによって現実化されようとしています。現代の電子化の奔流は、いわばこの「バベルの図書館」の実現を目指しているかのようです。

しかし、いかに膨大な電子情報にアクセスが可能になろうとも、そこに学問研究に対する熱意と知的遺産に対する尊敬の念がなければ、それらは単なるデジタル記号の無秩序な集積にすぎません。また、いかに最新のIT機器を備えようとも、そこに利用者と図書館員とが形作る緊密な知的共同体が成立していなければ、図書館は早晚パソコンの物置き場と化すに違いありません。その意味で、図書館は「電子情報」だけでは成り立たず、それを活性化させるための知的情熱、すなわち目には見えない「プラス・アルファ」を必要とする場所です。それがなければ、「バベルの図書館」はほかならぬ「バベルの塔」の轍を踏むことになるでしょう。だとすれば、先に図書館の「原点」と呼んだラム

の学問に対する純粋な憧憬は、今日なお、いささかも古びていないと私は考えています。

おそらく21世紀の大学図書館は、ラムの愛惜した古き良き「ポドレー図書館」とボルヘスが構想した究極の「バベルの図書館」との間を行きつ戻りつしつつ、その理想的なあり方を求めて試行錯誤を続けていくことでしょう。私もまた、伝統ある本学の附属図書館を支える一員として、その未来の「かたち」を模索することに微力を尽くしたいと思っています。皆様のご支援とご鞭撻をお願いする次第です。

(のえ・けいいち)

## アインシュタイン，物理学，図書館

北青葉山分館長 倉 本 義 夫



私の専門は物理学です。ご存知の方も多いと思いますが、本年2005年は国際物理年になっています。これは、1905年にアインシュタインが奇跡と呼ばれる3つの重要な論文（特殊相対性理論、ブラウン運動の理論、光電効果の理論）を発表してから、ちょうど100年になることを記念したものです。実は、私も高校生のときに相対性理論にあこがれたことがきっかけで、物理学を志したのです。当時、私の高校には熱心な若い先生がいて、相対性理論を課外授業として有志生徒に教えてくれました。この理論の不思議さと美しさに魅了されてしまい、以来数十年を経て現在に至ったというわけです。このたび、井原薬学研究科教授の後任として、北青葉山分館長を拝命した機会に、表題の内容で小文をしたためたいと思います。

アインシュタインの日本への招待は、当時の京都帝国大学教授西田幾太郎と東北帝国大学教授石原純の発案によるといいます。実は、石原純は原阿佐緒との不倫がマスコミを賑わせ、アインシュタイン来日の前年に大学を去っています。アインシュタインは1922年11月に来日しましたが、日本への船中でノーベル賞受賞の知らせを受けています。12月2日には仙台を訪れ、翌日、超満員の聴衆を前にして相対性理論の一般向け講演を行いました。通訳は東北帝国大学教授愛知敬一でした。仙台以外では石原純が通訳しましたから、辞職のわだかまりがあったのかもしれない。ちなみに聴講料は一般が3円、教員・学生は2円であり、3円は当時の大工一日の手間賃に迫る高額でした。アインシュタインの仙台滞在は12月4日朝までと短いものでし

たが、この間、土井晩翠と食事して意気投合しました。晩翠には、日光滞在中および帰国途中の榛名丸の中から2度にわたって書簡をおくっています。この中の一通では、晩翠の子息への心遣いさえ書かれています。アインシュタインの書簡は、後に遺族から東北大学に寄贈され、附属図書館に貴重資料として保管されています。

さて一口に物理学といっても、種々の分野があります。アインシュタインの偉大さは、相対性理論のような宇宙規模の物理から、ブラウン運動のような分子運動の物理に至るまで、広い領域に巨大な足跡を残したことに現れています。現在の物理学は、当時よりもさらに巨大かつ精細化し、すべての分野に精通している研究者はほとんどいなくなりました。私は、物性物理学と呼ばれる分野を研究しています。物性物理学は、多数の原子が集合してできる固体や液体が、どのようにして固有の性質を持つようになるのかを、実験と理論をつき合わせて解明しようとする学問です。

単独の電子の性質はよく知られていますが、固体中で多数の電子が互いに相互作用すると様子が変わってきます。つまり、相互作用の効果で1個の電子の場合には想像もできない多彩な現象が現れるのです。その代表的な例として超伝導があります。超伝導は、水銀の電気抵抗を測っていた研究者により1911年に偶然見出されました。超伝導になる温度は絶対温度で約4度、摂氏零下269度です。これはヘリウムが大気圧のもとで液化する温度と大体同じです。絶対温度273度が、氷ができる温度ですので、水銀の超伝導は日常の環境では見られないことがわかります。超伝導の機構解明は、固体中の相互作用に関する深い洞察を必要とし、1956年までかかりました。1986年には、銅の酸化物でこれまでとは違うタイプの超伝導が発見され、その後10年ほどで、転移温度は絶対温度約160度



まで上昇しました。これは液体窒素で冷やせる温度であり、この調子では室温超伝導の実現も近いと期待されましたが、残念ながらここで足踏みしたままです。

物質には超伝導の他にも不思議で面白い性質がたくさんあります。ひとつの例は、電子があたかも複数の粒子に分裂するように見える現象です。これは分数量子ホール効果と呼ばれ、集積回路として広く用いられている半導体表面の電子系に、強い磁場をかけるときに生じます。この現象は1982年に発見され、電子同士のクーロン相互作用にその起源を持つことがわかっています。

私の専門は、相互作用のもたらす様々な帰結を理論的に研究することです。強い相互作用の効果をもっとも明瞭に見ることができるように、1次元空間の多電子系をおもちゃとして、いじくりまわすことがあります。1次元の電子は、単純と思われるかも知れませんが、相互作用の効果が強く現れるので、現実の3次元系よりも扱いが難しい側面があります。1次元多電子系の研究は、量子力学完成後まもなく始まり、しばらくは理論先行型でした。しかし最近では、ほとんど1次元とみなせる鎖状物質が続々と見つかってきたので、実験的研究も盛んです。私は、超対称性という特別の性質を持つ1次元電子系のモデルを1991年に提案し、同時にその厳密解を導出しました。驚くべきことに、この厳密解では電子の持つ基本的属性である電荷とスピンの、あたかも分裂したように振舞うことが数学的に明瞭な形で見えます。私が行っている研究は、アインシュタインの偉業に比べると実にささやかなものです。それでも、やっている当人には面白くてやめられないものがあります。物理学の面白さを、先の世代に教えてもらったわけですから、この高度な文化を次の世代にも伝えるのは現役世代の責務だと思っています。

ここで、大学図書館が学問の継承と発展に果たす役割に触れましょう。図書館の利用法は、インターネットの普及とともに急速に変化しています。研究者にとっては、膨大な学術雑誌を閲覧できることが図書館の重要な機能でした。しかし論文の閲覧は、この数年間でほとんどネ

ットワークからのダウンロードに代わりました。多数の電子雑誌を単独の研究室や学科で購入することは、不合理かつ費用的にほとんど不可能なので、これを全学規模で管理することが図書館の新しい仕事になっています。

インターネットは、知識の断片を与えることはできますが、大量情報の通覧性に欠けるため、体系的な学習には適していません。この意味で、学生がまとまった情報を消化し、習得するには、書籍が非常に重要であることに変わりはありません。これに関連して、次の現象に注意しましょう。最近の図書館では、教員はまばらで学生の姿を多く見かけます。特に、川内の附属図書館本館では、大勢の学部学生が利用していて状況を呈しています。一方、大学の外では公営図書館が10年ほど前から新しい利用方式を採用し、多くの市民が訪れるようになりました。それに対して専門性の強い東北大学の分館では、入館者の数が減る傾向にあります。例えば、北青葉山分館では年間の利用者数は10万人程度ですが、ここ数年は毎年ほぼ10%程度減少しています。減少分のうち、かなりの部分が教員と大学院学生で占められるのではないかと想像しています。今まで、雑誌の閲覧に来ていた人たちが、ダウンロードの利用により来館する必要性をなくしたわけです。

実は、研究者にとっても書籍の機能はネットでは代替できません。そこで、よい書籍を充実し、検索機能を高めて使いやすくすることが、これからの図書館の重要な任務になると思います。インターネットの強力な情報検索機能と、ゆったりした図書館の情報習得機能を相補的にとらえ、両者の優れた点を融合した場を提供することが、今後の図書館運営を考える一つの軸になる、と思います。より使いやすく、学術文化の継承と発展をはぐくむ場としての図書館をめざして、私も微力を尽くしたいと考えております。

(くらもと・よしお)

## 温故知新

工学分館長 松 本 繁



平成17年4月より、江村 超先生の後任として工学分館長を拝命しました。学生時代から今まで図書館の利用者として専らサービスを受ける側でしたので、少しでも恩返しを

できればと思っております。

私の所属は工学研究科化学工学専攻で、現在の専門はプロセス制御工学です。1967年に本学工学部を卒業して以来、約40年間研究に携わってきた中で「温故知新」の大切さについて、身をもって感じたことを述べてみようと思いません。

私は、学生時代から約20年間は主として固気混相流に関する研究を行ってきました。固気混相流というのは、気流中に粉や粒状の固体を含む流れのことです。この固気混相流は粉粒体の輸送（ニューマチック・コンベヤーという）や乾燥（気流乾燥という）などのほかに、粉粒状の固体触媒を用いた反応装置などにも応用されております。このような固気混相流は気流だけの流れに比べ複雑な現象を示します。当初は流動機構に関する研究をしてました。例えば、水平流の場合どのようなメカニズムで固体粒子が浮遊して飛ぶのか、固体粒子の速度や濃度分布はどのようになるのかなどについての研究でした。大学院の学生時代に、1968年頃だったと思いますが、研究室（前田研究室）の雑誌会で同級生のA君が、N.Amundsonの固体粒子・流体間の伝熱に関する論文（1956）を紹介しました。その中で、連立偏微分方程式の解析解を有

限ベッセル変換を用いて解いた結果が示されておりました。しかし、その論文では、有限ベッセル変換については、I.N.Sneddonの著書“Fourier Transforms”（1952）を引用するだけで具体的な方法は示されていませんでした。その当時は、直接その本にあたることもなく、うまい方法があるものだという程度でした。

それから、7、8年後に、研究の方向が固気混相流の伝熱の問題に発展したとき、モデルの解析の過程で似たような問題に遭遇しました。このときは、連立偏微分方程式のモデルを解くだけではなく、それを基にパラメータ同定をずる問題でしたので、単なる数値計算では計算量が膨大なものになり、何とか解析解を得られなしかと考えました。いろいろやってみましたがなかなかうまくいかず、大分悩んだ末に前述の有限ベッセル変換のことを思い出しました。早速、Sneddonの本を調べてみました（当時はまだ工学分館はなく、化学系の図書室で所在を調べ、理学部数学科かあるいは工学部機械の図書室から借用したように記憶する）。その本には、有限ベッセル変換は有限ハンケル変換とも言い、そのほかあらゆる積分変換についても書いてありました。拡散方程式などの放物形偏微分方程式は座標系に応じて有限フーリエ変換や有限ハンケル変換を用いると、空間座標に関する2次微分の項が除かれ、簡単な常微分方程式の集合に変換されることを知ったときは大きな感動を覚えました。そこで、前田研と大谷研合同の勉強会で得意になって紹介したこともありました。当時は、コンピュータによる数値計算が大流行で、解析解が得られそうな問題まで数値計算に頼る傾向がありましたが、それに対す

る反発もありました。また、このとき改めて手元にあった応用数学の本を調べてみると、表現は違うものの、寺澤寛一の「自然科学者のための数学概論」(1954)に、ベッセル関数による関数の展開として、本質的に同じことが書いてあり、自分の不勉強さを思い知りました。

ところで、肝心の研究のほうは、有限ハンケル変換を用いてモデル式の解析解を求め、パラメータ同定の目的は達成しました。この有限ハンケル変換を最初に紹介してくれたA君には大いに感謝したものでした。これが最初の「温故知新」の体験でした。

1980年に所属研究室が変わったこともあり、1984年ごろからは研究をプロセス制御の分野に移行することになりました。最初に手がけたテーマは、移動層吸着塔(吸着剤の層がゆっくり下降しながらガスと接触し、ガス成分の吸着特性の違いを利用して多成分混合ガスの濃縮・分離を行う装置)に温度分布を形成する制御問題でした。このような空間的な分布を制御することを分布定数系の制御といいます。最初は、通常の制御システム設計法に従いました。まず、制御対象プロセスの物理モデルを導くと偏微分方程式となりますが、これを空間座標に関して差分近似して連立常微分方程式のモデルに変換し、多変数制御理論を用いて制御システムを設計する方法をとりました。実際に実験してみると、一応ある程度の制御はできたのですが、あまり満足のいく結果ではありませんでした。特に、このとき疑問に思ったことは、せっかくプロセスの現象を表現する物理モデルが得られるのに、わざわざ差分近似をして精度の劣ったモデルに書き換え、それを基に制御システムを構成するという点でした。本来、制御とは、制御対象の未来の動きを予測し、望ましい動き(結果)をさせるような操作(原因)を求めるといふ因果律の逆過程ですので、予測に用いるモデルは精度の高いものほど良い予測ができ、その

結果より良い制御ができるはずですが、ところが、上述の方法はこれに矛盾しているように感じました。それでなくとも、物理モデルは幾つかの仮定の下に導かれるものですから、現実には何らかのモデル誤差は避けられません。それなのに、さらに精度の悪いモデルに書き換えたものを制御に用いることには納得がいきませんでした。少なくとも物理モデルの情報を劣化させずに直接制御モデルとして利用する方法がないかと考えるようになりました。

当時そんなことで悶々としている折、ふと有限積分変換のことを思い出しました。早速、これを用いて偏微分方程式の物理モデルを常微分方程式の集合に変換し、制御モデルとして用いることを検討してみました。その結果、この変換によって偏微分方程式が簡単な1階の常微分方程式の集合になり、制御システムの設計が非常にスマートになるように思われました。勿論、幾つか理論的に詰めなければならない問題は予想されましたが、やってみる価値はあるように思いました。そこで、シミュレーションと簡単な実験から検討してみると、意外とうまくいきそうなことがわかりました。この段階になって分布定数系の制御を本格的に研究してみようと思いました。文献調査などもこの頃になってようやく始めました。その結果、国内外で既にかなり多くの研究がなされていることを知り驚きました。その中には、我々が考えた方法と基本的原理が同じで固有関数展開法という方法があり、これに基づく制御方式をモード制御ということもわかり、一瞬がっかりしました。しかし、よく調べてみますと有限積分変換というアプローチをとっていないため、状態量分布の推定には非常に厄介なフィルタ方程式を用いなければならない点、我々の方法のほうがはるかに簡単な方法になっていることを知り安堵しました。研究を始める前に丹念に文献調査をしていたら、多分恐ろしくなって、いまさら分布定

数系の制御の研究をやるなどという気にはな  
らなかつたと思います。学生時代に恩師の前田  
四郎先生が「研究を始めるとき、あまり文献を  
読むものではない」という意味のことを言われ  
ましたが、その意味がわかつたような気がしま  
した。あまりにも丹念に文献を調査すると、文  
献に書かれていることに無意識のうちに支配さ  
れ、新たな発想が生まれ難くなることと、何よ  
りも既往の研究を超えて新たなことに挑戦しよ  
うとする勇気が湧かなくなることを懸念された  
ためでしょう。

その後、研究は分布定数系の制御に特有の問  
題である最適センサー配置問題（全体の状態量  
分布を推定するためにはいくつのセンサーをど  
のように配置するのがよいか）や最適操作端配  
置問題（状態量分布を制御する場合、操作端を

どの位置にいくつ配置すればよいか）等につい  
ても、このアプローチをとることにより比較的  
簡単に解決することができました。以上が二度  
目の「温故知新」の体験でした。

同じことでも見方を変えることによって新た  
な展開ができることを実感した次第です。しか  
も同じ有限積分変換という手法が全く異なる研  
究テーマのブレークスルーにつながったことに  
は不思議な感じがしております。まさに、故徳  
久 寛先生の徳久語録にある「柳の下に泥鰌は  
二匹いる」の言葉どおりでした。

また、研究を通して多くの教訓を得ました。  
特に、物事の本質を本当にわかるということの  
難しさを痛感するとともに、「學而不思則罔、  
思而不學則殆」（論語）の大切さを身にしみて  
感じております。

（まつもと・しげる）



## 豆腐と大豆

農学分館長 國 分 牧 衛



世界の「先進国」では、栄養の過剰摂取や運動不足などから、肥満や生活習慣病が増え、深刻な社会問題になっている。わが国もその例外ではなく、肥満や生活習慣病を予防

する食事をテーマにした本やテレビ番組が溢れている。その中で、「大豆」は健康を保つ機能性成分の宝庫として、ひととき脚光を浴びている。大豆を研究対象としている者として、うれしい気持ちと、何を今更と思う気持ちが交錯する。

大豆はアジア諸国では古くから栽培・利用され、起源地である中国では約4千年の歴史があるといわれている。味噌や醤油は日本で独特の発達を遂げたが、その原形は中国にある。代表的な大豆食品である豆腐は中国が起源とされている。中国、明の時代に書かれた「本草綱目」によると、「豆腐、淮南王劉安の作りしものなり」とある。劉安は紀元前2世紀の人物なので、この記述に基づくと、豆腐は紀元前から存在したことになる。この説の信憑性は不確かだが、中国では少なくとも唐代中期（8～9世紀）にはあったろうと推定されている。

豆腐はわが国にはいつ頃伝えられたのか？春日神社の記録に、寿永2年（1183）に唐符（豆腐）との記述がある。おそらく、奈良時代に遣唐使が持ち帰り、奈良や京都から全国に伝わったものであろう。遣唐使とは別に、朝鮮から伝わったルートも知られている。いずれにしても、わが国の豆腐の歴史は千年近くの長きにわた

る。しかし、一般庶民の食卓に上るようになったのは江戸時代になってからといわれている。このことは、江戸時代の代表的な料理本である「豆腐百珍」から窺い知ることができる。

「豆腐百珍」は1782年に発行されたもので、豆腐料理約100種類が紹介されている。この本は、大阪で出版され、作者は何必醇という中国風の名であるが、柚子やわさびなどの伝統的な日本のスパイスのみを使っているところから、日本人とされている。この本では、豆腐料理約100種を、尋常品、通品、佳品、奇品、妙品、絶品の6等級に分けて記述している。我々に馴染みのある「よせ豆腐」や「凍豆腐」などはやはり尋常品として分類されている。一方絶品には「揚げながし」、「鞍馬豆腐」など7種が分類されており、名前だけからはどのような料理か想像がつかない。この「豆腐百珍」は当時ベストセラーとなり、翌年には「豆腐百珍続編」、そしてその5年後には「豆腐百珍余録」と立て続けに続編が出版されたほどである。江戸時代のグルメブームの火付け役を果たしたといえるのではないかと。現在でも豆腐は日本人の大事な食材である。豆腐の英訳は「tofu」である。日本式に「ト・フ」と発音しても通ずる。このことから、豆腐は日本を代表する食べ物といえることができる。

豆腐、味噌、醤油など、実に多くの伝統的加工食品の原料として使われている大豆であるが、生産量は南北アメリカ諸国に圧倒されている。わが国は年間約4百万トンもの大豆をアメリカなどから輸入し続けており、国内自給率は数%程度にすぎない。数年前からは中国も輸入が急増し、この2、3年は日本を上回り中国が

最大の大豆輸入国となった。世界の大豆生産をリードしているアメリカやブラジルの大豆栽培の歴史は、アジアのそれに比べるときわめて新しい。アジアを除く国では大豆は主として食用油として利用され、搾油した残りは家畜の餌として大量に利用されている。大豆は作物としての起源から2千年以上にわたり、アジア諸国の作物であったが、20世紀以降の短期間に、新大陸を代表する作物に成長したことになる。

近年、大豆に含まれている植物性タンパク質、イソフラボン、レシチンなどの成分が、コレステロール低下作用、骨そしょう症防止作用、ガンの抑制作用などを示すことが明らかにされている。このため、アジア以外の国でも食品としての利用が進むことが考えられ、今後ますます大豆の需要が増加すると予測されている。わが国としても、輸入に頼りすぎず、もっと国産の大豆を生産していきたいものである。

私は25年以上にわたり大豆を研究対象にしてきたが、大豆は、我々の理解の及ばない不思議な性質を多く秘めている。植物としての大豆の

もっとも大きな特徴（大豆らしさ）は、根粒菌との共生である。根粒菌は大豆の根の細胞を住み家とし、土壌中の空気に含まれる分子状窒素をアンモニアに変える能力を持っている。宿主である大豆はいわば家賃代わりにこのアンモニアを受け取り、複雑な代謝過程の結果アミノ酸やタンパク質を合成している。私達が享受している大豆食品の高い栄養価値や機能性は根粒菌の力に大きく依存している。近年、この大豆と根粒菌との共生の機構に対する理解はかなり深まってきた。しかし、その機構を人為的に制御し、少ない肥料で生産量を増加させる技術は未完成である。畑で栽培された根粒菌と共生しているため大豆はとても気まぐれで、肥料の調節などの栽培的な手段でコントロールすることは容易ではない。実にデリケートな性格を持っている。私は、大豆の持つ根粒菌との共生能を最大限活用し、肥料に依存しない大豆生産の可能性を追求している。毎日のように食べている豆腐、味噌、醤油の多くが、日本国内で生産された大豆から作られるように願いながら。

（こくぶん・まきえ）

## 平成17年度川内地区学部・研究科新入生オリエンテーションにおける図書館ガイダンス開催

情報サービス課参考調査係

今年度の新企画第一弾として、川内地区学部・研究科新入生オリエンテーションにおける図書館ガイダンスを開催した。

当企画は、川内地区の学部・研究科（文・教・法・経・国際・教情）が行う新入生オリエンテーションに当館職員が参加して、図書館概要の説明と図書館が開催する新入生オリエンテーションへの参加を呼びかける内容で、7会場、約950名に対して実施された。

この試みは、昨年度の川内地区図書委員会で検討されていたもので、部局の希望に従い、情報サービス課の職員を説明者と補助者2名体制でオリエンテーション会場に派遣し、約10分間程度図書館と新入生オリエンテーションの紹介をさせて頂いた。

教育学部のみは、オリエンテーションの時間

を1時間も割いて頂き、図書館について詳しく説明する事を希望された。そこで、会場を図書館にして新入生の皆さんに来館してもらい、図書館の紹介のみならず、大学での学術研究と図書館、教育学部生に読んで欲しい資料というテーマで当係がお話させて頂き、加えて貴重書展示室を見学して頂いた。

また各会場では、「情報検索の基礎知識 基本編2004」を全新生に配布し、広報を行った。

各学部オリエンテーションのスケジュール上、4月6日と7日に日程が集中したため、サービス課の職員を同時刻に複数部局へ派遣しつつ、教育学部ガイダンスの館内会場設営を行うといった、なかなか厳しい展開ではあったが、皆さんの協力で何とか無事に終了する事ができた。この紙面を借りてお礼申し上げます。

## 平成17年度新入生のための図書館オリエンテーション、及び新入学留学生のための英語によるオリエンテーションの開催

情報サービス課参考調査係

平成17年度の新入生のための図書館オリエンテーションは、4月11日～4月15日（1日3回）の期間、当館視聴覚室で開催された。

当オリエンテーションは、4月に新しく入学した学部生・大学院生が、図書館を利用するための最低限の知識をガイダンスすることが目的で、この5日間で約750名の参加があった。

当オリエンテーションの中味は、前半が図書館紹介ビデオの上映と図書館員からの口頭による補足説明、後半が図書館見学であった。

毎年放映している図書館紹介ビデオは、3月から当係で改訂作業を進めていたが、完成が当オリエンテーションに間に合ったので、最新版の内容を放映させて頂いた。

司会と見学会引率者は、情報サービス課を中心に情報管理課、総務課からも応援を募り、無事5日間、計15講演を成功の内に終了させた。

なお前項目で報告がある「平成17年度川内地区学部・研究科新入生オリエンテーションにおける図書館ガイダンス」の効果か、前年度と比較して約100名の参加者増加がみられた。

また今年度から、英語が堪能な閲覧第一係員の協力で、英語による新入学留学生のためのオリエンテーションを、4月13日～4月15日の3日間行った。

このオリエンテーションは、新入生オリエンテーションが終了後に、同じ会場で英語版の図書館ビデオを上映し、その後、館員が英語によ



見学引率者の説明を熱心に聞く参加者

る補足説明を行い、最後に見学を行うという内容であった。なお見学引率者は、英会話を必要とする関係で英語の堪能な職員3名に担当して頂いた。

英語によるオリエンテーションは、今年度は試行である。3日間、計3講演を乗り切れたものの、運営体制や広報などの面でまだまだ改善の余地があると感じた。異動で担当者が変更になっても企画を継続できるようにすることが、最大の課題である。

終わりに、この紙面を借りてご協力頂いた館員各位に、感謝の意を表すものである。

## 国際交流センター主催 新入学留学生オリエンテーション における図書館ガイダンス

情報サービス課参考調査係

前項目で報告した英語による新入学留学生のためのオリエンテーションを紹介し、留学生の図書館に対する関心を深めてもらう目的で、国際交流センター主催の新入学留学生オリエンテーションにて図書館のガイダンスを行わせて頂いた。

当企画は、国際交流センター（留学生課、留

学生第二係）が行う新入学留学生オリエンテーションに約10分間、図書館の紹介と、図書館オリエンテーションの広報とを英語でお話させて頂くもので、当日の参加者約150名の留学生に対して英語が堪能な閲覧第一係員が説明を行った。

## 平成17年度蔵書検索講習会（初級編）の開催

情報サービス課参考調査係

平成17年度蔵書検索講習会（初級編）は、4月20日、4月27日、5月11日（いずれも水曜日1日2回）の期間、当館システム研修室で開催された。

当講習会は、当図書館の蔵書を扱う際に最も基本にして重要な Online Catalog システムについて最低限の知識を講習することが目的で、この3日間で約40名の参加があった。

当講習会は、前半に Online Catalog の説明と実習を交互に行い、後半に練習問題を通して、

前半で得た知識の定着を狙った。

講師と補助は、参考調査係と図書館情報教育支援ワーキング・グループから選出し、無事3日間、計6講演を成功の内に終了させた。

また今年度から試行で、留学生向けの英語による蔵書検索講習会を行った。この講習会は、上記の蔵書検索講習会が終了後、同会場で行い、内容・テキストも英訳した以外はほぼ同じ内容を講習した。講師と補助者は英語が堪能な職員4名に依頼した。こちらの方は、3日間で14名



の参加者があった。

広報は、川内地区を中心に掲示ポスター、図書館ホームページを通じて行い、学部教務掛から全教官へ授業内での周知をお願いするメール配信の依頼や、生協食堂での広告配布作業も行った。留学生向けの講習会については、国際交流センターでの掲示や、日本語を不得手とする留学生が理系の学部が多いことを鑑みて、川内

地区のみならず他地区でのポスター掲示も行った。

3日間で日本語・英語の両講習会を併せて計約50名の参加があり盛況を博すとともに、何とか当企画を運営できた。この紙面を借りてご協力頂いた館員各位に、感謝の意を表すものである。

## 駐日欧州委員会代表部 東北大学附属図書館を視察

情報サービス課参考調査係

去る4月26日、駐日欧州委員会代表部の広報部次長の Anne Kofoed 氏と同じく広報部の市川啓子氏が、当館本館を視察された。

この視察は、EU（欧州連合）が行っている2003年から始まるEU資料寄託図書館（EDC: European Documentation Centre）の審査・評価の一環として行われたもので、当館がEU資料をどのように運営しているかについて実地審査をするために行われた。

当館は1983年から館内にEU資料コーナー（当時はEC）を設け、EUから送付される公文書、雑誌、パンフレット類の公開・保存を行ってきたが、当日はそれら配架場所の紹介や、運用面での解説を、参考調査係と雑誌情報係で行わせて頂いた。

また本学のヨーロッパ研究状況と、EU資料の所蔵状態は密接に関係することもあり、当日は、文学研究科：佐藤勝則教授、経済学研究科：柘植徳雄教授、法学研究科：戸澤英典助教授の3名のヨーロッパ研究者の方々に代表部との意見交換を行って頂いた。意見交換は終始なごやかな雰囲気で行われ、約1時間程度で散会した。

この機会に、EDCを運営する当方が、実際、EDCを利用される先生方と意見交換を行えた事や、EU資料の紹介を行えた事も非常に有益であった。



視察中の駐日欧州委員会代表部のお二人

なお視察の講評は、7月に国内のEDC各館に送付される。

この時期、オリエンテーション・講習会を運営しながら、尚かつ参考調査のカウンターを維持し、それでもって視察に対応するという、当係3名で対応するには厳しい業務量に、鼻血も出なくなるほど精励した。無事に対応ができてほっとしている。

成功の一因として上層部の効率よい采配・指導・助力と、協力者の皆様の力があつたからだと思われる。この紙面を借りて当日ご協力頂いた情報サービス課の皆様と雑誌情報係の皆様及び、ヨーロッパ関連研究者の先生方にお礼申し上げます。

## 2005年日・EU フレンドシップウィークイベント： EU の多様性 - 加盟国の様々な言語 - 開催

情報サービス課参考調査係

2005年日・EU フレンドシップウィークイベントは、5月23日から6月3日までの12日間、附属図書館本館の入館ゲート付近フロアで開催された。

この日・EU フレンドシップウィークのイベントは、2002年から5月に毎年附属図書館本館で開催しており、今回で4回目となるが、今年、「EU の多様性 - 加盟国の様々な言語 - 」ということで、加盟国25ヶ国で使用されている言語の辞書を図書館資料から選んで展示した。実際の展示は、25ヶ国別に国の名称、基礎データ、国旗、使用言語の辞書を展示し、中央に統合通貨ユーロとヨーロッパ経済に関するパネル展示を行った。また公式ジャーナルやパンフレット、絵はがき等を配布用に展示し、あらかじめ用意しておいたアンケート用紙に記入をして下さった見学者の方には、携帯ストラップ、マンガ、ピンバッジのいずれかを差し上げた。

当展示会は、昨年まで2号館フロアで開催していたが、当年は1号館の入館ゲート付近で行ったため入場者数は推計するに約1,400名と昨年の推計入場者数約200名から大幅に増加した。加えてアンケート回答者も約150名の大人数にのぼり、当方にも有益な意見が集められたと同時に、今回の企画で初めて当館がEDCに指定されている事を知ったという意見が多かった事には考えさせられた。その他、アンケート結果で多く見られたものは、会場が狭く人通りが多い場所故、ゆっくり見学できないという事や、加盟国のもっと具体的な素顔（食べ物、衣装、写真など）を知りたいという声が多かった。そ

の反面、これは自分も思ったのであるが、当館には25ヶ国のほぼ全体の辞書を所蔵しているという事自体への驚きの感想も多く見受けられた。

なお今回の展示に連動して実際に展示に使用した25ヶ国の紹介ページを下記のように公開しているので、ご興味がある方や展示を見落として残念に思う方は是非一度目を通していただければ幸甚である。



<http://www.library.tohoku.ac.jp/main/eu2005/eu2005a.html>

また当企画は、「2005日・EU 市民交流年」イベントとしても加盟しており、本年1年間を通して行われる交流イベントの一翼を担っていたのだが、他のEDCと比べても遜色ない展示が行えたと自負している。

この紙面を借りて、ご協力下さった駐日欧州委員会代表部、文学研究科西洋史 佐藤勝則教授、情報サービス課、雑誌情報系の皆様に感謝を表すと共に、お礼申し上げたい。

## 研究室向け個別図書館講習会の開催

情報サービス課参考調査係

毎年4～6月にかけて研究室向けの個別講習会を開催し、通常の講習会とは事なり、その研究室の研究テーマに合う形の内容をお話させていただいているが、今年度は3学部4研究室に対して、合計6日間の講習を行った。

- ・教育学研究科人間形成論・教育史研究室  
4 / 19, 4 / 26 出席者15名
- ・文学研究科行動科学専攻研究室  
5 / 6, 5 / 13 出席者18名
- ・教育学部教授学習科学実験, 履修生  
5 / 13 出席者15名
- ・経済学研究科経営史演習履修生  
6 / 14 出席者15名

当講習会は、研究室や授業の担当教員からの依頼で、当係が講習会を運営するもので、講習内容については依頼者側と相談の上、決定して行っている。

ある研究室からの依頼には、当講習会の受講により、期末レポートの課題に解答できるような技術を身につけさせて欲しいというものが

あった。具体的には、ある研究者の論文がどのように引用され、その学問がどのように発展したかについてまとめるというレポート課題に対して、当図書館でサービスを提供しているWeb of Scienceを活用し、論文の引用・被引用関係を把握して結果をまとめるという内容で、講習を行わせて頂いた。

また、当参考調査係の業務について説明を求められた研究室や、貴重書展示室の見学を行った研究室もあった。

このような個別講習会の利点は、なんとと言っても相手のニーズに即した内容をお話できることで、受講者の熱意がこちらにも伝わり、当方としても気持ちがかもるものである。また他の講習会と異なり、研究室と予定を話し合ってから行うので、広報の多寡による出席者の増減を気にしなくてよいことがあげられる。

加えて先方のニーズを知る経験から、その分野での新たな発見がおきたり、探索ツールへの探究心が一層向上されたりするのである。

なお今年度の個別講習会予定は、全て終了したが、この一文を読まれた教員の方で、研究室・授業単位の講習会を希望されるのであれば、下記連絡先にご連絡ください。

desk@library.tohoku.ac.jp



## 平成17年度目録システム地域講習会（図書コース）開催

6月15日から17日までの3日間、附属図書館本館において、国立情報学研究所との共催による「目録システム地域講習会（図書コース）」が開催されました。

この講習会の目的は、目録業務担当の図書館職員が、国立情報学研究所の総合目録データベースの登録・運用に関する知識・技術を習得することですが、今年は東北地区の大学図書館や公立図書館はもとより、北海道地区からの参加者も含め、15名の受講者がありました。

今回の講習会では、冒頭の「目録システム概論」及び「目録情報の規準」の講義を国立情報学研究所の職員が担当しましたが、その後の「目録検索」、「登録総論」、「図書登録実習」等のカリキュラムについては、国立情報学研究所のデータベース実務研修を修了した本学附属図書館職員等が、講師及び講師補助者として講義や実習に携わりました。



受講者の方々は業務経験や習熟度が様々であり、また普段使い慣れているパソコンとの機種の違いもあって、初めのうちは講義内容やパソコン操作に戸惑いも見受けられましたが、講師等の熱心な指導や適切なアドバイスによって徐々に緊張もほぐれ、最終的には十分な理解が得られたようで、受講後のアンケートには所期の目的を達成出来たことへの謝意が多数寄せられました。

（総務課）



## 最近の話題から（その4）「美味しい江戸」

情報サービス課閲覧第二係長 菅 原 透

附属図書館では毎年「企画展」を開催し、所蔵資料の一端を広く一般に公開しています。

11月に開催する平成17年度の企画展テーマは「江戸の食文化～スローフードのルーツをたどる～」です<sup>(注1)</sup>。現在鋭意準備中ですが、食文化関係の資料を調査していると、思わず「へ～」と知見を広められる事柄が多々あるものです。それは現在の伝統的な日本料理の数々が、この江戸時代に創意工夫がなされ、発展してきたからに他なりません。ここではその中から江戸っ子の好物の一つ、「蕎麦(そば)」に関してご紹介します。



図1：『北斎重信東海道五十三驛』

「東海道」といえば廣重の「東海道五十三次」が有名ですが、廣重の他にも数多くの作家たちによって「東海道」シリーズは描かれています。本館所蔵の上記資料もその一つで、宿場駅で蕎麦を食べている姿を見ていると、ツルツルとおいしそうに蕎麦をすする音が聞こえてきそうです。

さて、絵のなかでは「十六文」と値段が表示されていますが、これは落語をご存じの方には

「時蕎麦」でおなじみでしょう<sup>(注2)</sup>。このような手頃な値段で気軽に屋台で食べられたところから、蕎麦は江戸のファーストフードとも呼べる食べ物でした。その上この十六文という値段は、100年以上の間、据え置かれていたようです(1744年頃から1860年頃まで)。それだけ江戸庶民に好まれ、生活に根ざした食べ物だったともいえるでしょう。

(一文の現代貨幣価値は、10～20円前後。)

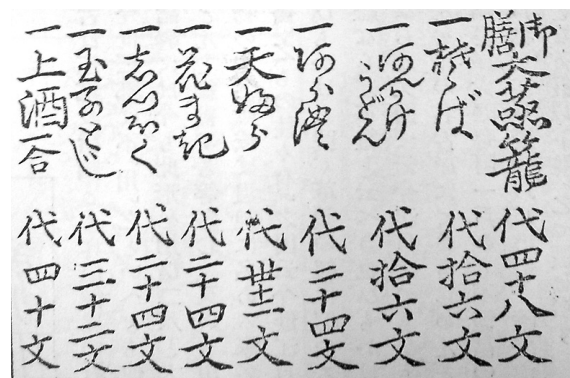


図2：幕末頃の蕎麦屋の品書き(『近世風俗志(守貞漫稿)』より) \*右から「御膳大蒸籠, そば, あんかけうどん, あられ, 天ぷら, 花まき, しっぽく, 玉子とじ, 上酒一合」<sup>(注3)</sup>

ところで、現在でもスーパーの乾麺コーナーには「二八そば」と記された品物を目にします。この「二八」の意味をご存じでしょうか？

「二八」とは、小麦粉二割とそば粉八割で打った蕎麦のことをいう説のほかに、二八、十六(2×8=16)の語呂で、一杯十六文のことをいう説があるそうです。なにしろ「二六そば」や「三四そば」、そのうえ「二八うどん」などという、粉の種類では説明が難しい代物もあった様なので、言葉の意味も時代とともに変化しているのかもしれない。



図3：『東都高名會席盡』

屋台蕎麦がある一方，高名な蕎麦屋も多数あったのが江戸時代です。上記の「東都高名會席盡」は江戸の有名な料亭と，その料亭の場所や屋号にちなんだ役者絵を描いた浮世絵集です。料亭等の背景を歌川廣重が，役者絵を三代歌川豊國が描いた合作となっています。上記の絵は背景に「瀧そば」という蕎麦屋が描かれた一枚です。

さて，蕎麦は江戸っ子にとってはファーストフードといえるものですが，現代から見るとスローフード<sup>(注4)</sup>として見直すことができます。全国各地の郷土色あふれる蕎麦や，本格的な蕎麦打ち体験などはスローフード活動の代表的なものでしょう。江戸時代の食文化を想像しつつ，現在の食生活に思いを巡らすのも楽しいことです。

本館所蔵の狩野文庫は，江戸学の宝庫とも呼ばれています。ここで紹介した資料をはじめ，食文化に関連する資料を多数所蔵しています。平成17年度の企画展ではそれらの資料を趣向を凝らして展示する予定です。どうぞご期待ください。

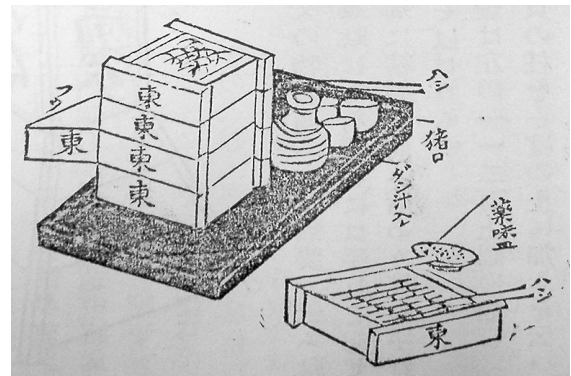


図4：盛り道具等（『近世風俗志（守貞漫稿）』より）

注1)「平成17年度企画展」：開催期間 平成17年11月18日（金）～27日（日），開催場所『白松ロフトホール』

注2)「時蕎麦」：落語の一。そばの代金16文を，時刻を聞いてごまかし1文得をしたのを，ある男が真似て逆に損する話。（『広辞苑 第5版』より）

注3) 蒸籠 = せいろ，あられ = ばか貝の柱，花まき = 焼き海苔の揉み加え，しっぽく（卓袱） = 惣菜。

注4)「スローフード」：「食事くらいゆっくりとろう」という，多忙な現代人の食生活を見直す動き。イタリア・トリノに住む男性が，アメリカ系ファーストフードのローマ出店に怒り，ファーストの反対語スローをテーマに協会を作ったのが発祥。スローフード協会は，ゆっくり歩く「かたつむり」をシンボルマークに次の三つの活動を行っている。消えていくおそれのある伝統的な食品を作る小生産者を保護する。質のよい食品を作る小生産者を守る。子供たちを含め，消費者に味の教育をする。（『現代用語の基礎知識2005』より抜粋）

参考文献

1. 原田信夫著，「江戸の料理史」，中公新書，1989
2. 原田信夫編，「江戸の料理と食生活」，小学館，2004
3. 日本麺類業団体連合会企画，「そば・うどん百味百題」，柴田書店，2003

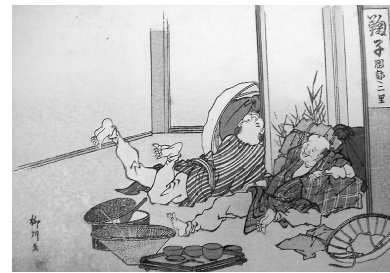
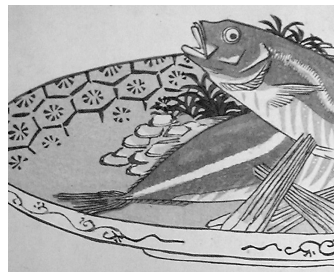
（すがわら・とおる）

## 東北大学百周年記念事業 平成17年度特別企画展のお知らせ

テーマ：「江戸の食文化」スローフードのルーツをたどる

期 間：平成17年11月18日(金)～11月27日(日)

場 所：白松ロフトホール



### 第36回東北地区国立大学図書館協会総会

表記会議が、4月21日(木)山形大学が当番館となり、ホテルキャッスルを会場として東北地区7大学から22名が参加して開催され、次の協議題について協議が行われた。

- 1) 第52回国立大学図書館協会総会に向けての準備事項等について
- 2) 学習図書館機能の充実について
- 3) 学術機関レポジトリ構想への取り組み方について
- 4) 各大学における学術雑誌確保のための方策等について
- 5) 東北地区国立大学図書館におけるメールによる文献複写物の送付について
- 6) 次期当番館について

その結果、次のとおり決定した。

1. 第52回国立大学図書館協会に向けての準備事項等について
  - 1) 平成17年度地区選出の理事館候補館及び監事候補館  
地区選出の理事館候補館として東北大学を選出した。  
監事候補館として、東地区については、一橋及び千葉大学、西地区については、神戸大学及び島根大学を推薦することとした、
2. 次期当番館について  
・東北大学  
また、協議題4)の各大学における学術雑誌確保のための方策等について活発な意見交換を行った。

## 会 議

### 学 内

#### 17. 4.26 平成17年度第1回附属図書館運営会議

- ・協議事項
  - 1) 農学分館の移転について
  - 2) 学生用図書整備検討委員会報告への対応について
  - 3) 今後の会議の進め方について
  - 4) その他
- ・報告事項
  - 1) 国立大学図書館協会東北地区国立大学図書館協会総会の報告について
  - 2) 遡及入力事業報告について
  - 3) 国立大学法人等職員採用二次専門試験について
  - 4) 図書館主催のオリエンテーションについて
  - 5) その他

#### 17. 5.27 平成17年度第2回附属図書館運営会議

- ・協議事項
  - 1) 学外機関での研修対象者の選考について
  - 2) 各種委員会委員の委嘱について
  - 3) その他
- ・報告事項
  - 1) 国立大学図書館協会理事会について
  - 2) 外国雑誌センター館会議にについて
  - 3) 東北地区大学図書館協議会について
  - 4) 地域目録講習会(図書コース)の開催について
  - 5) 企画展の市内での開催について
  - 6) 「東北大学生のための情報探索の基礎知識」の出版について
  - 7) 会計実地検査について
  - 8) 職員新人研修等について
  - 9) 今年度の開館について
  - 10) 図書の資産について
  - 11) 北青葉山分館からの報告について
  - 12) その他



## 附属図書館商議会商議員名簿

平成17年4月1日現在

所 属	氏 名	任 期
図 書 館 長	野 家 啓 一	官 職 指 定 (17. 4. 1~18. 11. 5)
図 書 館 副 館 長	今 泉 隆 雄	官 職 指 定 (14.12. 1~18.11.30)
医 学 分 館 長	佐 藤 洋	官 職 指 定 (15.12. 1~17.11.30)
北 青 葉 山 分 館 長	倉 本 義 夫	官 職 指 定 (17. 4. 1~19. 3.31)
工 学 分 館 長	松 本 繁	官 職 指 定 (17. 4. 1~19. 3.31)
農 学 分 館 長	國 分 牧 衛	官 職 指 定 (17. 4. 1~19. 3.31)
情報シナジーセンター長	川 添 良 幸	官 職 指 定 (17. 4. 1~19. 3.31)
総 長 主 席 補 佐	磯 谷 桂 介	官 職 指 定 (16. 4. 1~ )
文学研究科教授	齋 藤 征 雄	16. 9. 1~19. 3.31
教育学研究科教授	梶 山 雅 史	17. 4. 1~19. 3.31
法学研究科教授	蟻 川 恒 正	17. 4. 1~18. 3.31
経済学研究科教授	猿 渡 啓 子	17. 4. 1~19. 3.31
理学研究科教授	高 木 泉	16. 4. 1~18. 3.31
医学系研究科教授	下瀬川 徹	17. 1. 1~18. 3.31
歯学研究科教授	奥 野 攻	13. 4. 1~19. 3.31
薬学研究科教授	岩 淵 好 治	16. 4. 1~18. 3.31
工学研究科教授	桑 野 博 喜	17. 4. 1~19. 3.31
農学研究科教授	池 上 正 人	17. 4. 1~19. 3.31
国際文化研究科教授	北 川 誠 一	17. 4. 1~19. 3.31
情報科学研究科教授	尾 畑 伸 明	16. 4. 1~19. 3.31
生命科学研究所教授	仲 村 春 和	17. 4. 1~19. 3.31
環境科学研究科教授	松 木 浩 二	17. 4. 1~19. 3.31
教育情報学研究部教授	村 木 英 治	14. 4. 1~18. 3.31
金属材料研究所教授	後 藤 孝	15. 4. 1~19. 3.31
加齢医学研究所教授	佐 竹 正 延	14. 4. 1~19. 3.31
流体科学研究所教授	小 濱 泰 昭	16. 4. 1~18. 3.31
電気通信研究所教授	長 康 雄	16. 4. 1~18. 3.31
多元物質科学研究所教授	大 塚 康 夫	17. 4. 1~19. 3.31
東北アジア研究センター教授	磯 部 彰	16. 4. 1~18. 3.31
高等教育開発推進センター教授	関 内 隆	8. 4. 1~19. 3.31

# 人 事 異 動

平成17年 6月30日現在

発令年月日	新 官 職	氏 名	旧 官 職	備 考
17. 3. 31		井 原 正 隆	北青葉山分館長	任期満了
"		江 村 超	工学分館長	"
"		谷 口 旭	農学分館長	"
"		尾 形 博	医学分館総務係長	定年退職
"		森 脇 ち か	北青葉山分館整理・運用係長	"
"		相 川 晶 子	工学分館整理・運用係長	"
"		佐 藤 百 代	農学分館図書係長	"
"		湯 本 智 子	電気通信研究所総務課図書係長	"
"		塚 田 弘 子	図書一般職員（農学分館図書係）	"
"		山 本 衆 子	"（経済学研究科・経済学部図書室）	"
"		小 澤 史 子	技術補佐員（多元物質科学研究所図書室）	任期満了
17. 4. 1	附属図書館長	野 家 啓 一		併 任
"	北青葉山分館長	倉 本 義 夫		"
"	工学分館長	松 本 繁		"
"	農学分館長	國 分 牧 衛		"
"	山形大学情報管理課課長補佐	日 出 弘	工学分館管理係長	出 向
"	総務課庶務係長	小野寺 金 巳	未来科学技術共同研究センター総務係長	配置換
"	総務課情報企画係長	佐 藤 初 美	情報サービス課閲覧第二係長	配置換
"	情報管理課雑誌情報係長	半 澤 智 絵	図書一般職員（情報管理課雑誌情報係）	昇 任
"	情報サービス課閲覧第一係長	南 館 義 孝	情報管理課雑誌情報係長	配置換
"	情報サービス課閲覧第二係長	菅 原 透	図書一般職員（情報シナジージャー学術情報支援係）	昇 任
"	医学分館総務係長	鈴 木 啓 一	研究協力部研究協力課研究協力係長	配置換
"	医学分館整理係長	横 山 美 佳	医学分館運用係長	"
"	医学分館運用係長	今 出 朱 美	図書一般職員（医学分館整理係）	昇 任
"	北青葉山分館整理・運用係長	松 元 義 正	医学分館整理係長	配置換
"	工学分館管理係長	米 澤 誠	総務課情報企画係長	"
"	工学分館整理・運用係長	及 川 恵美子	金属材料研究所総務課図書係長	"
"	農学分館図書係長	星 政 則	情報サービス課閲覧第一係長	"
"	金属材料研究所総務課図書係長	真 籠 元 子	図書一般職員（医学分館総務係）	昇 任
"	電気通信研究所総務課図書係長	村 上 康 子	"（医学分館整理係）	"
"	宮城教育大学運用係長	沼 田 幸 子	"（工学分館整理・運用係）	出 向

発令年月日	新 官 職	氏 名	旧 官 職	備 考
17. 4. 1	図書一般職員（情報管理課雑誌情報係）	菊 地 良 直	図書一般職員（北青葉山分館整理・運用係）	配置換
"	事務一般職員（医学分館総務係）	西 濱 るり子	理学研究科・理学部事務一般職員	配置換
"	図書一般職員（医学分館整理係）	落 合 浩 平	図書一般職員（工学分館整理・運用係）	"
"	"（北青葉山分館整理・運用係）	小飯塚 猛		採 用
"	"（工学分館管理係）	中 村 浩 子	図書一般職員（工学分館整理・運用係）	配置換
"	" "	坂 本 香 代		採 用
"	"（工学分館整理・運用係）	菅 原 育 子	図書一般職員（生命科学研究科図書室）	配置換
"	" "	堀 野 正 太		採 用
"	" "	小清水 裕 子		"
"	国立情報学研究所開発・事業部コンテンツ課	関 戸 麻 衣	図書一般職員（農学分館図書係）	転 出
"	図書一般職員（農学分館図書係）	小 幡 明 子	図書一般職員（宮城工業高等専門学校庶務課図書係）	採 用
"	" "	勝 本 加 奈 子	"（金属材料研究所総務課図書係）	配置換
"	"（経済学研究科・経済学部図書室）	佐 藤 優 美 子	"（工学分館管理係）	"
"	"（情報シナジーセンター学術情報支援係）	佐々木 智 穂		採 用
"	"（工学分館・管理係）	宗 川 かほり	図書一般職員（宮城工業高等専門学校庶務課図書係）	出 向
"	事務補佐員（情報管理課図書情報係）	佐 藤 直 美		採 用
"	" "	渡 辺 真 澄		"
"	"（情報サービス課閲覧第一係）	佐々木 美 帆		"
"	技術補佐員（多元物質科学研究所図書室）	板 橋 由 起		"
4. 5		小 林 有 子	事務補佐員(北青葉山分館管理係)	辞 職
4. 18	事務補佐員(北青葉山分館管理係)	佐 藤 千 春		採 用
4. 30		佐 藤 夏 美	事務補佐員（情報サービス課相互利用係）	辞 職
5. 10	事務補佐員（情報サービス課相互利用係）	及 川 優 子		採 用

## 編 集 後 記

平成17年度最初の木這子をお届けします。本号で取り上げられている記事の一つに、春に開催されたオリエンテーション等があります。

詳しい内容は記事に譲る事にして、4、5月のイベントの充実度は、近年目を見張るものがあります。私事ながら私が入学した約10年前と比べると、オリエンテーション、講習会の内容・回数をはるかに増加しており、当時の私もし現在学生なら、その親身の指導ぶりにきっと感謝したはず(?)です。

一方、教員から最近の卒業論文、修士論文の内容が年々面白くなってきている、と聞きます。要因は色々あるのですが、読書離れ

が進んだ今日、面白い物を書けという方が酷かもしれません。

図書館には「面白い本」が一杯あります。たとえ講習会を受けて検索術が上達しても、「面白い本」を数多く読み、「面白い学生生活」を送らないと、「つまらない」内容しか表現できません。

「面白い」論文作成、「面白い」学生生活、そして「面白い」人間形成のためにも学生の皆さん、図書館の本を読みましょ。そして「面白い」本探しのためにも、図書館主催の講習会に出席してくれるとうれしいです。

平成17年度広報委員会委員

委員長 諏訪田義美

\*高橋 信野, 小野寺金巳

\*木戸浦豊和, \*吉植 庄栄

\*湯目 昌史 \*尾田 陽子, 及川恵美子

渡邊 愛子, 白石 光雄

注) \*は木這子編集委員

---

東北大学附属図書館報「木這子」 第30巻第1号(通巻110号)発行日 平成17年6月30日

発行人 内藤 英雄 広報委員長 諏訪田 義美

発行所 東北大学附属図書館 〒980-8576 仙台市青葉区川内27-1 電話 022-795-5911, FAX 022-795-5909  
URL <http://www.library.tohoku.ac.jp/>